平成二十五年度

（児童指導員科）入学試験問題

国　語

試験時間　九：三〇～一〇：三〇

（注　意）

一　係員の指示があるまで、問題用紙及び解答用紙に触れないこと。

二　問題は二頁～十三頁に印刷されている。

三　解答用紙に氏名及び受験番号を記入のうえ、解答を所定欄に記載すること。

四　机の上には鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、時計（計算機能のついていないものに限る）、受験票以外は置かないこと。

五　受験票は番号札の手前に置くこと。

六　マスクを着用している者は、試験官が本人確認する間、マスクを外しておくこと。

七　ハンカチ、ティッシュペーパーを使用する者は、静かに挙手をして、係員の指示に従うこと。

八　試験中に気分が悪くなったり、トイレへ行きたくなったりした者は静かに挙手をして、係員の指示に従うこと。

九　試験問題に関する質問は一切受け付けない。

十　途中で退室する者は、解答用紙を机の上に置き、静かに挙手をして、係員の指示に従って退出すること。ただし、試験開始後三〇分間及び試験終了一〇分前の退出は認めない。

十一　試験終了後、試験問題は持ち帰ってよい。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

柳田國男は昭和一二年（一九三七）に、旧制高等学校生という当時のエリート青年たちに向けて「平凡と非凡」という講演をしています。この講演と柳田の他の著作から学んだことを交じえながら、「平凡教育」と「非凡教育」について、ここで考えてみようと思います。

柳田は言います。昔の村（コミュニティ）では、若者に対して「平凡教育」をしていたと。平凡教育は、そのコミュニティで生きていくための知恵の伝授を目指します。その知恵には、作物を植える時期など(ア)セイギョウに関わる知識や、人との（とりわけ目上の人や異性との）付き合い方、さらには神様やご先祖など、あの世の世界に対する礼儀などが含まれます。つまり、「自分たちのコミュニティをうまく回転させていくための知恵の伝授」が平凡教育だといえます。

私が面白いな、と思ったのはこのような知恵は、できるだけ短い言葉で伝授するものだ、と柳田が指摘していることです。なぜかというと、みんなが忙しく働いている、その合間に言うものですから、できるだけ短くて、面白おかしい言葉が望ましく、それは諺に近いイメージだと言っています。

もっとも、このような短い言葉での平凡教育というものが日常的だった半面、比較的長い言葉（いわゆる説教）を含めた、もう少し体系だった教育もありました。これらの教育には、単に天候を知る方法とか、読み書きそろばんという技術的な伝授だけではなくて、倫理観など、その人の価値観に影響を与える知恵も含まれています。

他方の「非凡教育」というのはどのようなものでしょうか。非凡教育とは他の人とは異なることを目指す教育のことです。いうまでもなく、現在の教育は非凡教育が中心となっています。「隣のAちゃんよりもよい成績をとりなさい」とお母さんが言ったとしたら、それは自分の子のAちゃんからの差別化を示唆しています。非凡教育とは別の表現を使えば、（　Ⅰ　）教育といえるかもしれません。

A平凡教育はみんな同じものをマスターし、同等の知識を身につけることが目的なので、そこまで至らない者には説教をしたり、諺的な(イ)ゲンジを吐いたりして、掬い上げようとします。そのような発想はこの非凡教育にはありません。非凡教育は、分かりやすい表現をとれば、そのクラスの子どもたちの成績を点数化して、上下の一線上に並べることが可能な教育、子どもたちを差別化する教育です。私たちに親しい現在の学校教育がそれです。理想論は別にして、現実はそうだと思います。

そして柳田は次のような趣旨のことを述べ、非凡教育を批判しています。

――自分（柳田）自身も幸か不幸か、非凡教育を受けたし、今日の聴衆の多くも非凡教育を受けたかと思われる。だが、この非凡教育を受けた者には確かに優秀機敏の者が多くいたことは事実ではあるものの、他方、批判好きで、他人に同情する心のない、さらには、群衆を人間ではなく機械のように思い込んで、この機械を引き回してみたいというような途方もない夢をいだく者がいた。そのような者たちの存在が日本の近代史を特徴づけているひとつではないか。

これが第二次世界大戦のあとの講演ならば、暗に戦争批判ではないかと深読みもできますが、これは昭和一二年（一九三七）ですからそうではありません。しかし嗅覚の鋭

い柳田は、この時代においても、非凡教育の悪い側面を具現化したような、一般の人たちを人間とはみなさない指導者がおり、それが日本近代の歴史にある種の影を落としていたことを感じていたのでしょう。

さらに柳田は要約すれば、次のようなことを言っています。

――非凡教育の普及によって平凡教育が没落していると思うのは誤りだ。ふたつの教育が存在していること、すなわち諸君（旧制高校の学生たち）が今まで受けてきた教育以外に、もうひとつ別に青年を教育する方法が(ゥ)ゲンゼンと存在することを知っておく必要がある。たとえば、平凡教育が最も避けるべきものと教育したのは、手前勝手であるとか、横着であるとか、自分さえよければとか、人に迷惑をかけても平気でいるとかいうことである。一方、このごろこそあまり言わなくなったけれども、親も当人もまた学校の先生たちも、子どもが勉強するのを非凡となるための手段であることを認め、よく勉強して偉い人になるようにと口癖のように言っていた。これはすなわち、「平凡であることを（Ⅱ）する教育」である。

このように柳田は指摘していますが、「勉強しなさい！」は、このごろでもよく言われている言葉です。『サザエさん』でも、お父さんの波平さんが、しょっちゅうカツオのテストの成績が悪いことを怒っています。現代では、ごく普通の家庭でも当たり前に非凡教育がなされています。

ところで、サザエさん一家の隣には、伊佐坂難物という小説家が住んでいます。私はこの伊佐坂家というのが、サザエさん一家以外の近隣の家族、すなわちコミュニティ・メンバーの活動を象徴的に示していると解釈しています。この伊佐坂さん一家は、テレビアニメになるとよく出てきます。それはひとつの家族内の出来事だけでは息苦しく感じる最近の傾向を示していると思っています。

伊佐坂さん一家が「近隣＝コミュニティの人たち」を象徴的に示しているとするなら、アニメにこんな興味深い話がありました。

サザエさん一家が百貨店の屋上で子ども向きの『赤ずきんちゃん』ショーを観ています。実は、その出し物の狼のぬいぐるみの中に入っているのは、伊佐坂難物の息子である伊佐坂甚六君なのです。この甚六君は大学受験を目指している浪人生で、勉強に忙しいはずの浪人生がアルバイトをしていることが父親の難物にバレるとたいへんです。バレないように、サザエさん一家は協力するのですが、結局、難物にバレてしまいます。サザエさんたちは難物が甚六君を「勉強をしないでこんなことをしているとはなにごとだ！」と叱るかと思っていたのですが、実際には「あの(ェ)エンギはなんだ、子ども向けの芝居でも引き受けた限りは真剣に取り組みなさい」と、自分の役割を一生懸命果たしていないことを叱りました。カツオは、「うちのお父さんだったら勉強をしないことを叱るのに、さすがに小説家だねェ」と言って感心するのです。

「学校の勉強をして成績を上げなさい」＝非凡教育、「自分の役割を一生懸命果たしなさい」＝平凡教育、という図式がたまたまこのアニメのストーリーでは対比的に出てきています。コミュニティのメンバーを象徴している伊佐坂さんが平凡教育で対応しているところを私は興味深く感じ、エピソード全体としても平凡教育の大切さを指摘していることを新鮮に感じました。

柳田の言う平凡教育・非凡教育をまとめると、ごく大まかにいえば、平凡教育はコミ

ユニティ（村など）が担っていて、それが青年教育の基本でした。ところが明治以降少しずつ個々の家庭が教育を担うことになってきます。そして家庭が責任を担う教育の中心は非凡教育になりました。現在、主に家庭が子どもの教育の責任を担っていますから、当然のことながら、非凡教育の色彩が強くなっています。

いうまでもなく、平凡教育にも欠点はあり、非凡教育にも長所があります。平凡教育の欠点は、自分自身の意見や判断を軽視し、多数の意見に従う側面があるところだし、逆に非凡教育の長所は、自立した精神と抜きん出た才能を生かすところにあると柳田は指摘しています。

けれども、私たちが認識すべきことは、ふたつあります。ひとつめは家庭が非凡教育を担うことになったのは、日本の歴史の中でたいへん新しいということ。特別に家柄のよい家庭は別として、私ども庶民は、ほんの数(オ)セダイ前までは平凡教育しか受けていなかったのです。非凡教育はこのように歴史の浅いものですから、現在の家庭の教育において、親が子どもに「勉強しなさい！」「よい成績をとりなさい！」以外に言えないような不器用な現象は、自分たちの責任というよりも、歴史の浅さの責任、と責任転嫁をして気楽にやるのがよいかもしれません。

ふたつめは、コミュニティは平凡教育を担ってきた長い伝統があることです。子どもたちには本来、平凡教育も不可欠なはずです。もちろん、各家庭や学校でも平凡教育的なことはできますが、伝統あるコミュニティにそれをお願いするアイデアが今、注目されています。

（鳥越皓之『「サザエさん」的コミュニティの法則』より）

問一　傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

(ア)　セイギョウ

① セイ死をさまよう
② セイ裁を加える
③ セイ式な手続き
④ セイ密な機械
⑤ セイ意ある態度

(イ)　ゲンジ

① ジ愛の精神
② ジ伝を書く
③ ジ令をもらう
④ 方位ジ石
⑤ ジ務所に行く

(ウ) ゲンゼン

① ゲン稿を書く
② 意欲のゲン退
③ ゲン界を乗り越える
④ ゲン職の知事
⑤ ゲン戒態勢をしく

(エ) エンギ

① ギ量がある
② ギ心暗鬼
③ ギ性をはらう
④ ギ善者
⑤ 模ギ試験を受ける

(オ) セダイ

① 寛ダイな処分をする
② ダイ議士に選ばれる
③ 史実をダイ材にした小説
④ 及ダイ点は取れたようだ
⑤ ダイ本通りに演じる

問二　空欄Ⅰ・Ⅱに入る語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

	Ⅰ	Ⅱ
①	支配	助長
②	合理	評価
③	競争	蔑視
④	協調	許容
⑤	効率	看過

問三　傍線部A「平凡教育はみんな同じものをマスターし、同等の知識を身につけることが目的」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 程度の低い知識でも、コミュニティ全体に浸透することによって大きな力になることを、平凡教育は目指しているから。

② コミュニティのメンバーが、すぐれた知識を共有することによって、コミュニティ全体の水準を上げることを、平凡教育は目指しているから。

③ コミュニティのメンバー各人がもっている知識が多様化してしまうことは、ひいてはコミュニティの亀裂を招く危険性を、平凡教育は教えようとしているから。

④ コミュニティのメンバーとして、知っていなければ生きていけないような知恵の伝授を、平凡教育は目指しているから。

⑤ コミュニティにおける知識の格差を是正することが、コミュニティの安定に寄与することを、平凡教育は教えようとしているから。

問四　傍線部B「非凡教育の悪い側面を具現化したような、一般の人たちを人間とは見なさない指導者」とあるが、これを言い換えた表現として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 他人と同じものをマスターし、同等の知識を身につけることを無駄だと考えている者。

② 子どもたちを成績で序列化することによって、子どもたちを差別化している者。

③ 自分自身の意見や判断を軽視し、多数の意見に従うことを是とする者。

④ 手前勝手で横着であっても、目的実現のためには仕方がないと考える者。

⑤ 群衆を人間よりも機械のように思い、これを引き回したいというような夢を抱く者。

問五　傍線部C「自分自身の意見や判断を軽視し、多数の意見に従う側面」とあるが、平凡教育にそのような側面があるのはなぜか、その理由として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 平凡教育は、他の人と異なることを目指す方向が基本なので、結果的に多様な意見が出てくることを促すから。

② 平凡教育は、個々人に対応した教育ではなく、コミュニティという集団単位の教育であるから。

③ 平凡教育は、独自の意見や判断をもたないことがコミュニティにおける自己保身につながると教えているから。

④ 平凡教育は、自分自身の意見や判断を変えてでも、コミュニティ全体の合意を何よりも優先することを教えているから。

⑤ 平凡教育は、短い言葉で教えるため、自分自身の意見を体系的に構築する知恵を得られないから。

問六　問題文の内容と合致するものとして、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 平凡教育は、コミュニティをうまく回転させていくための教育である。
② 非凡教育は、コミュニティをうまく支配、コントロールするための知恵を伝授する。
③ 平凡教育は、家庭や学校でも十分担うことができる。
④ 非凡教育は、コミュニティによって長い間担われてきた。
⑤ 非凡教育は、自分の役割を一生懸命に果たすことを求めている。

問七　筆者は論を進める上で、柳田國男の教育論と『サザエさん』で描かれているものをどのように用いているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 筆者は、柳田の教育論に異を唱えながら、それと対照的なサザエさん一家の教育姿勢を肯定的に評価している。
② 筆者は、サザエさん一家の教育姿勢の背景にあるものとして柳田の教育論を探り当て、批判的に検証している。
③ 筆者は、柳田の教育論と対置する例としてサザエさん一家の教育姿勢をとり上げ、詳しく相違点を分析している。
④ 筆者は、柳田の教育論を援用しながら『サザエさん』で描かれた伝統教育の陳腐さを指摘している。
⑤ 筆者は、柳田の教育論を解説しつつ、それと接点のあるサザエさん一家をとり上げ、現行の教育の在り方への提言をしている。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ほかの誰よりも折口信夫には、神道には何ができて、何ができないか、どこが良いところで、どこは宗教としてだめかが、はっきり見えていた。明治以来、政府内のイデオローグたちはたいした見識もなしに、神道をキリスト教に向かいあえるほどの宗教に仕立て上げることができるなどと信じて、日本人の霊性の伝統に(ア)チメイ的な打撃を与えるような、めちゃくちゃな(イ)シサクをたびたび断行してきた。

その過程を通じて、神道は国家の「正義」をささえる、国民の倫理性の根源としての位置づけを与えられるようになった。つまり、神道は合理化されて、A近代主義の逆立ちした表現形態に、たどりついてしまうことになったのである。

土地土地に根づいた古い形をもった神道が、日本人の生活を導く倫理の源泉となってきた歴史的事実が、近代国家としての日本の「国民」を薫育し、教化していくための道徳原理ともなる、という合理的な形にすりかえられてしまった。その結果として、神道はその内的な生命を萎縮させ、頽廃させることになったのである。

折口信夫は彼の「民俗学」をもって、そのような生命の萎縮と、懸命の戦いを続けてきた。ところが、戦争の過程を通じて、彼の目の前にあきらかな事実となって露呈されたのは、神道がもはや人々の宗教情熱に触れることすらできなくなってしまっている、という(ウ)クウキョな現実だったのである。

〈中略〉

のちになって、彼はこう書いている。「戦争中の我々の信仰を省みるとB神に対して悔いずには居られない。我々は様々祈願をしたけれど、我々の動機には、利己的なことが多かった。さうして神々の敗北といふことを考へなかった。我々は神々が何故敗けなければならなかったか、と言ふ理論を考へなければ、これからの日本国民生活は、めちゃめちゃになる」（「神道宗教化の意義」）。

その「理論」として折口信夫が考えたのが、「神道の宗教化」という主題だったのである。彼は戦後になるとすぐさま神職者たちに向かって、この主題を情熱をこめて語り出すことになる。神道には宗教としての組織化の試みが、かつておこなわれたためしがなかった。

「私は思ふ。神道は宗教である。だが極めて茫漠たる未成立の宗教だと思ふ。宗教体系を待つこと久しい、神話であつたと思ふ。だから美しい詩であつた。其詩の暗示してゐた象徴をとりあげて、具体化しようとした人が、今までなかつたのである」

たしかに、神道には宗教としての満足のいくような組織化や体系化が、ほどこされたことがなかった。だいいち神道というその名称からして、仏教との(エ)タイショウでちょっとおとしめるような意味で使われだした言葉なのである。

あえて言えば、日本人は、民族の自然智（Natural Wisdom）の茫漠たる集合体のようなものをさして、かりに神道と呼びならわしてきただけで、それを仏教や陰陽道のような体系に組織だてようという試みも、おこなわれてはこなかったし、それ以上に、そういうものを宗教に仕立てようなどという試み自体が、なんとなく神道の精神にもとる、不純な行為のようにも、見られてきたのである。

それをこの時期に、折口信夫はあえて「宗教化」しなければだめだ、と力説したのだ。

しかも、よく言われているように、アジア宗教の特徴でもある多神教として組織だてるのではなく、ユダヤ教やキリスト教の特徴でもある一神教として、この民族の自然智の茫漠たる集合体に、ひとつの明確な組織と体系をあたえる仕事にとりかからなければならない、とまで考えるにいたっている。

このような折口の思考を、わたしたちは戦後の混乱期に特有の、挫折と解放感の入り交じった、一時期の熱気の産物として処理すべきものなのか。（Ⅰ）ここには神道のみならず、日本人の思想の歴史にとって、黙って通り過ぎることの出来ない、重要なプログラムが語られているのだろうか。『折口信夫全集』（中央公論新社）の中でも、もっとも深い謎をはらむ諸論文を集めた第二十巻は、これまで十分に読みとかれたためしがない。（Ⅱ）、ここが転回点なのである。折口信夫の全思想は、ここに集められた諸論文が正しく読みとかれないかぎり、理解できたとは言われないだろう、とわたしは思う。

たしかに、よく考えてみれば、ここで折口信夫は。たいへんに矛盾したことばかりを、語っているようにも思える。宗教の組織化というのは、どこの世界でも、国家の成立ということと一緒におこっている。語りことばを文字に書き表すシステムが整い、それをもとにして思考の道筋を論理立てる方法が開拓され、その論理を駆使して自分たちがおこなってきた特殊な体験を組織化できるようになってはじめて、宗教の(ｲ)コウチクが可能になる。そのためには、自然な共同体ネットワークのレベルを超えた、国家という新しい概念の登場を必要とした。

だが、それは民族の自然智の茫漠たる集合体に、深刻な改造を加えることになる。もっとはっきり言えば、民族の自然智の茫漠たる集合体である折口的な「神道」は、宗教となった瞬間に、死んでしまう性質を持つものなのだ。そうなると、彼は「神道の宗教化」ということばで一体何を言おうとしていたのかさえ、わたしたちにはわからなくなってくる。

このことは、アメリカ先住民の場合を考えてみれば、よくわかる。彼らはきわめて高度な自然智の収蔵庫を、つくりあげてきた。そこから、生活の倫理をくみだしてくるような生き方を、彼らは長い間続けてきたのだ。アメリカ先住民は木々や岩や泉のような自然のうちに、たくさんの霊的な存在を実感して暮らしていた。しかも、彼らはそうした霊的存在すべての背後に、「グレート・スピリット」なる根源的一者の存在を考えていた。つまり、彼らは民族の自然智の集合体に見事な組織化をおこない、そこから一神教的なものの考え方まで、引き出してきていた。彼らはまさしく、折口的「神道」の実践者であったのだ。

ところが、アメリカ先住民は彼らのその知恵の体系を、けっして宗教に成長させようとはしなかった。むしろ、宗教となっていく道を拒絶したのだ。それは、彼らがこの広い大陸に国家をつくりださなかった、あるいは国家のようなものが成立しそうになると、すぐにそれに対する解体作用が働いて、もとの部族ネットワークの状態にもどそうとしてきた、という事実に照応している。

神道的なるものが、宗教に成長をとげていくときには、それと一緒に神道的なものが生きる世界は、根本的に質的な変容をこうむる。そうするとそこではもはや、神道的なものは、まっすぐな生命を実現することができなくなる。国家の否定者であった。アメリ

カ先住民は、「神道の宗教化」の否定者でもあった。

こう考えて見ると、「神道の宗教化」ということばで、折口信夫が本当には何を言いたかったのか、わたしたちには少しだけその本音が、見えてくるような気がするのである。彼はそのことばで、じつは「神道の超宗教としての実現」ということを、思考しようとしていたのだ。

宗教を超えるものとしての神道、あらゆる宗教の誕生以前にあり、またあらゆる宗教の終焉の後の世界に生まれるであろう知性の形態を、とりあえず「神道」という名前で呼ぶことにして、その実現のために、感覚と超感覚と知性を組織化していくための道を探ること。そのための新しい情熱を、日本人の魂のうちに着火させること。しかし、それは宗教の終焉の後にしか出現しない。折口信夫の考える神道とは、吉本隆明の言う「アフリカ的段階」にある思想の一形態として、はじめから世界史というものの外部にある思想なのである。

しかし、宗教の果てに出現する超宗教は、いきなり超宗教として生まれ出るのではなく、宗教がその内蔵プログラムのすべてを出し切ったところにあらわれる。ここに、折口的「神道」の矛盾が、発生することになる。なぜなら、神道はいまだに未成立の宗教だからである。神道は民族の自然智の茫漠たる集合体として、宗教以前の空間に生き続けている。

そういう性格をもった神道を、折口信夫は「神道の宗教化」ということばで、一足飛びに超宗教として、実現させようと願ったのである。神道を、キリスト教や仏教に遜色ないような、立派な宗教に組織化しようと呼びかけているのではなく、このことばでじつは彼は、そんなものを超えてしまったものの実現を、呼びかけていることになる。

ここに折口信夫の思想の未来性が宿っている、とわたしは思う。彼の考える神道は、歴史の中のどこでもまだ実現されたことのない、ひとつの理念の構造として考えられている。そしてそれが実現されるためには、いままでの宗教が一度も利用したことのない表現手段が活用されなければならない。だからそれはむしろ現代の高度なメディア・テクノロジーの時代でこそ、はじめて現実性をおびる思想なのではあるまいか、とすら思われる。

あらゆる宗教の終焉の果てに、組織化された自然智が、人類の思想の様式として復活を果たすのか、それとも、徹底的に合理化と技術化された世界からは、魂などというものは、葬り去られてしまうのか。わたしたちは次々と前後左右に危険な曲がり角が出現してくるような時代を生きている。しかしそういう時代にあってこそ、折口信夫の思想は、みずみずしい生命を輝かせているように感じられる。それは、彼が「古代」ということばで、歴史の誕生以前、その死以後を、つねに思考していたからなのである。

（中沢新一『古代から来た未来人　折口信夫』より）

問一　傍線部(ア)～(オ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

(ア)　チメイ

① 図書館の設チ
② チ滞なく届けよ
③ チ密な構成
④ 数チ化された図表
⑤ 企業の誘チに尽力する

(イ)　シサク

① 入隊のシ願
② シ途不明金
③ 計画の実シ
④ シ慕の念を抱く
⑤ 国の福シ政策

(ウ)　クウキョ

① 謙キョな態度
② 枚キョにいとまがない
③ 母は昨年死キョしました
④ 工事のキョ可がおりる
⑤ 依キョを示す

(エ)　タイショウ

① 指紋をショウ合する
② 左右対ショウ
③ 権力をショウ中に収める
④ ショウ像画を飾る
⑤ ショウ賛に値する

(オ)　コウチク

① 重コウな作品
② 回復の兆コウをみせる
③ 勝敗にコウ泥する
④ 流通機コウの改善
⑤ 絶妙な均コウを保つ

問二　傍線部A「近代主義の逆立ちした表現形態」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 古くから日本人の精神生活を支えてきた神道が、近代国家に利用され、太平洋戦争の敗北とともに衰退したということ。

② 古くから日本人の文化的生活を支えてきた神道が、近代国家に利用されることにより、宗教として認識されるようになったこと。

③ 古くからの日本人の生活を支えてきた神道が、明治以来の近代国家を支えるものになってしまったこと。

④ 神道が明治政府の保護を受ければ受けるほど、その内的生命を萎縮させ、本来の宗教としての力を失ってしまったこと。

⑤ 神道が明治政府の保護を受けることにより、今まで排他的に見られていた神道的な生活が民衆の中に浸透していったこと。

問三　傍線部B「神に対して悔いずには居られない」とあるが、それはどのような点においてなのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 日本全体が戦争に勝つことを神々に祈っておきながら、戦争に負けた原因を神道に押し付けて平然としている点。

② 国民一人一人が戦争に勝つことだけを盲目的に神に祈るだけで、負けた後の生活というものを考慮していなかった点。

③ 日本が戦争に勝つことを神々に祈っておきながら、神道を宗教として一貫した組織に仕立て上げられなかった点。

④ 戦争に勝つために神道を利用するだけ利用して、なぜそのようなわれわれが戦争に負けたのかを反省しなかった点。

⑤ 戦争に勝つために利己的に神道を利用した結果、戦争に負けてしまったことを国民一人一人が認識していない点。

問四　空欄部Ⅰ・Ⅱに入る語の組合せとして、もっとも適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

	Ⅰ	Ⅱ
①	それとも	しかし
②	なぜなら	つまり
③	こうして	だから
④	それに	そして
⑤	あるいは	いわば

問五　傍線部C「たいへんに矛盾したことばかりを、語っているようにも思える」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 宗教を組織化するためには、その背景として近代国家の成立を必然とするが、戦争に負けた日本にとって、それを期待するのは困難であるから。

② 宗教が組織化される要件は、その国家が独自の言語や文化を持っていることにあるが、戦争に負けた日本にその独自性を期待するのは難しいから。

③ 宗教の組織化は、歴史的に見ると必ず新しい国家の誕生とともに興っているが、長い伝統を持つ日本ではそれはもはや不可能であるから。

④ 宗教の組織化は、あらゆる宗教の本質にある民族の自然智という茫漠たる集合体のようなものがもつ力をそいでしまうから。

⑤ 宗教の組織化のためには言語による論理化を必要とするが、民族のもつ茫漠たる集合体である神道が、その変化に耐えることができないから。

問六　傍線部D『アメリカ先住民は、「神道の宗教化」の否定者でもあった』とあるが、なぜそう言えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① アメリカ先住民は、神道と同じように高い自然智の集合体を組織化したが、それを宗教のレベルには発展させなかったから。

② アメリカ先住民は、日本人以上に神道の理解者であったが、日本人と共に宗教へ成長させることを拒んだから。

③ アメリカ先住民は、神道と同じような自然智の集合体を組織化したが、それを宗教にまで成長させることには失敗したから。

④ アメリカ先住民は、同じ性質を持つ自然智の集合体である神道が、超宗教化することを認めてはいなかったから。

⑤ アメリカ先住民は、神道に対して、国教化することは宗教の終焉につながることを警告しようとしたから。

問七　本文の内容に合致するものとして、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

① 折口信夫が提案した「神道の宗教化」という問題は、現代の人類に対する警鐘であると捉えることができる。

② 折口信夫が提案した「神道の宗教化」という問題は、高度なメディアを駆使できる現代においてこそ実現できる可能性をもつ。

③ 折口信夫は、神道を宗教化するためには、高度に合理化された科学技術が必須であることに気づいていた。

④ 折口信夫が提案した「神道の宗教化」という問題は、高度に科学技術が発達した現代において、初めて理解される性質を持っている。

⑤ 誰よりも神道を理解していた折口信夫は、敗戦という体験によって日本宗教の脆弱性に気づいていた。

平成二十五年度国立障害者リハビリテーションセンター学院（児童指導員科）入学試験解答用紙

〈解答例〉

国語

受験番号

氏名

一

問一 (ア) ①　(イ) ③　(ウ) ⑤　(エ) ①　(オ) ②

問二 ③　問三 ④　問四 ⑤　問五 ②

問六 ①　問七 ⑤

二

問一 (ア) ⑤　(イ) ③　(ウ) ①　(エ) ①　(オ) ④

問二 ③　問三 ④　問四 ①　問五 ⑤

問六 ①　問七 ②

合計